

トビウオ通信 (H21 第 4 号)

http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/ (TEL 0855-22-1720)

《平成 21 年度上半期浮魚中長期漁況予報》

平成 21 年 3 月に開催された東シナ海～日本海南西海域にかけての対馬暖流域における主要浮魚類の長期漁況予報会議の内容を基に、山陰沖のまき網漁業が対象とする主要浮魚の平成 21 年度上半期(4～9 月、以下同じ)の中・長期的な漁模様の予測をします。

山陰沖における漁況(来遊)予報〔平成 21 年上半期(4～9 月)〕

マアジ:前年・平年を上回る マサバ:前年・平年並み

カタクチイワシ:前年・平年を下回る ウルメイワシ:前年並み、平年を下回る

マイワシ:前年を下回り、平年並み

※ 本文中で「上半期」は 4～9 月、「下半期」は 10～翌年 3 月、「平年」は過去 5 カ年(平成 16～20 年度上半期)の平均値、「前年」は平成 20 年度上半期をいいます。

マアジは前年・平年を上回る

東シナ海～日本海南西海域の漁況と今後

東シナ海～日本海南西海域における大中型まき網によるマアジのここ数年の漁獲量は、減少傾向にありましたが、平成 20 年は 2 万 8 千トンと前年の 1.5 倍と好調でした(図 1)。これは東シナ海中南部海域の漁獲量が大きく増加したためです。沖合域の今後の漁況は前年並みに推移すると予測されています。

一方、鹿児島県から山口県の沿岸域における平成 20 年度下半期の漁獲状況は前年・平年を下回りました。今後は前年・平年並みに推移すると予測されています。

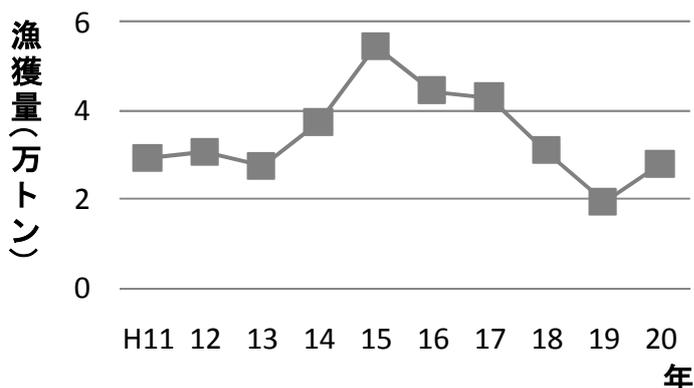


図 1. 東シナ海～日本海南西海域(大中型まき網)によるマアジ漁獲量の推移

山陰沖の漁況と今後 島根県の中型まき網によるマアジの漁獲量は平成 11 年以降、2～3 万トンで横ばい傾向にあります。平成 20 年度下半期は 0 歳魚と 1 歳魚を主体に約

8,400 トンの漁獲があり、前年同期（約1万1千トン）の約8割、平年同期（約1万4千トン）の約6割と低迷しました（図2）。

今後の漁況は、漁獲の主体になる0歳～2歳魚の山陰沖への来遊量によって決まります。1歳魚（大きさ15～20cm；H20年生まれ）の加入量は当所を含む4機関で行っているマアジ新規加入量調査の結果からみると、豊度の高かったH15年生まれと同程度と考えられます

（図3；加入量指数が高いほど豊度が高いことを表します。詳しくはトビウオ通信H20年第6号をご覧ください）。また、2歳魚（大きさ20～25cm；H19年生まれ）は1歳魚より豊度は低いものの、近年では高い水準と考えられます。これから山陰沖に加入してくる0歳魚（大きさ15cm以下；H21年生まれ）の豊度は予測困難ですが平年並みと考え、全体の来遊量は前年・平年を上回ると考えられます。

マアジのみならず漁場の形成は水温分布や潮流の影響を強く受けます。日本海に流れ込む対馬暖流の水温は、表面及び50m水深ともやや高めで推移すると予測されています（詳細はトビウオ通信H21年第3号をご覧ください）。また、現在のところ対馬暖流は韓国東岸から沖合をとおり隠岐諸島北部に流れる潮流が強く、反対に沿岸の潮流が弱くなっていることが観察されています。したがって、沿岸域の海況にメリハリが少ない現在の状態が続けば、沿岸に明瞭な漁場が形成されない可能性もあります。

マサバは前年・平年並み

東シナ海～日本海南西海域における大中型まき網によるマサバの漁獲量は、近年上向きですが資源水準は依然として低い状態にあります（図4）。平成19年の漁獲量は約5万6千トンと前年の

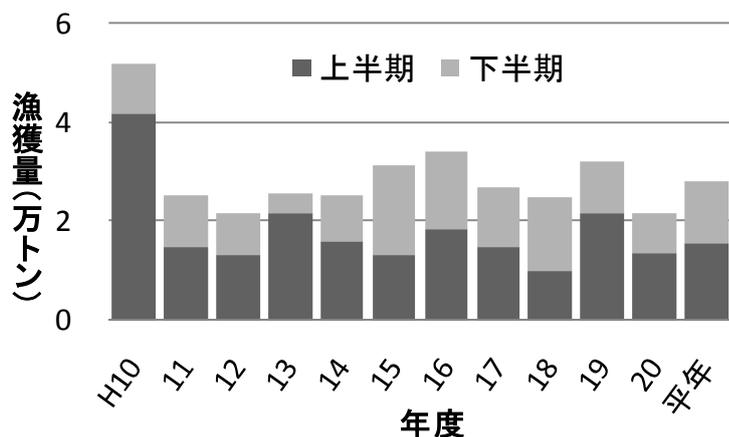


図2. 島根県中型まき網によるマアジ漁獲量の推移（年度別）

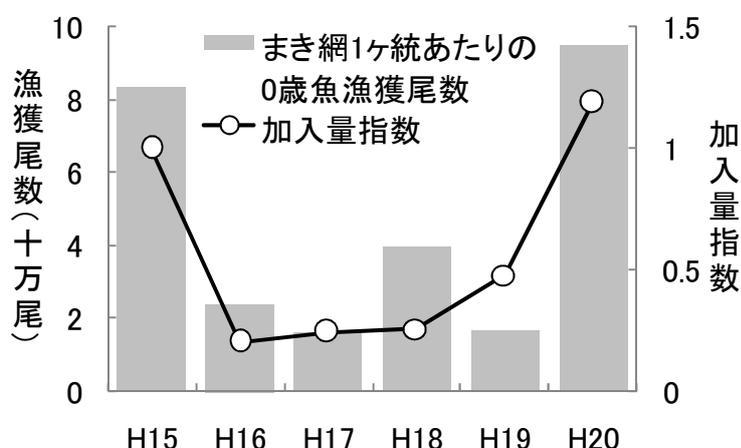


図3. マアジ新規加入量調査による加入量指数と6～12月におけるまき網（境港）1ヶ統あたりの0歳魚の漁獲尾数

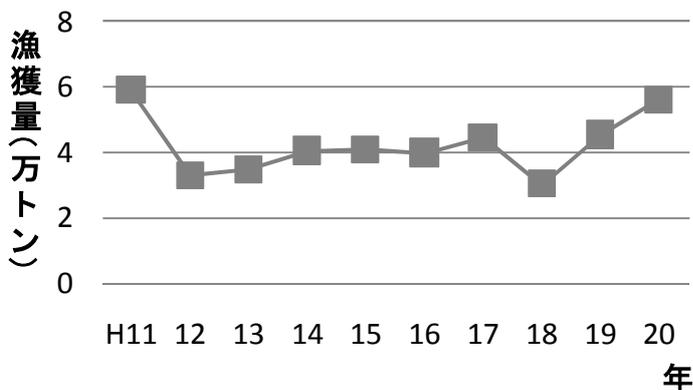


図4. 東シナ海～日本海南西海域（大中型まき網）によるマサバ漁獲量の推移

約 1.2 倍となりました。

島根県の中型まき網によるサバ類の漁獲量は主漁期にあたる下半期（10月～3月）の経年変化をみると、増減を繰り返して推移しています。平成20年度下半期の漁獲量は約1万9千トンで、前年同期（約4,800トン）の約4.1倍、平年同期（約8,200トン）の約2.4倍となり、特に10月～12月にかけてマサバ0歳魚を主体に大量に漁獲されました（＝来遊量が多かった）（図5）。

今後の漁況については、今期は盛漁期にはあたらないため漁獲は低調に推移しますが、1歳魚（25～30cm；H20年生まれ）が主体に漁獲され、8月以降は0歳魚（15～20cm；H21年生まれ）も漁獲されます。昨年10～12月にかけて多量のマサバ0歳魚が漁獲されたことからH20年生まれの資源水準は前年を上回ると考えられます。また、H21年生まれの資源水準は予測が困難ですが、親魚量の水準や初期生残に関わる環境要因からみると前年を下回ると見積もるのが妥当と考えられるため、全体の来遊量は前年・平年並みと考えられます。

カタクチイワシは前年・平年を下回る

島根県の中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量は、平成13年以降低調に推移しています。平成20年度下半期の漁獲量は約5,600トンと、前年同期（約9,800トン）の約6割、平年同期（約4,800トン）の約1.2倍となりました（図6）。

今後の漁況は、漁獲の主体となる0歳魚（大きさ5～10cm；H21年生まれ）と1歳魚以上（大きさ12～14cm；H20年以前生まれ）の来遊量で決まります。

昨年の秋、産卵親魚の南下がほとんどみられませんでした（H20年9月～H21年1月の島根県中型まき網での漁獲は皆無でした）。また、H20年生まれの資源量は過去10年間で最低水準と見積もられています。親魚量が少ないためH21年生まれも余り期待できません。よって、今期の来遊量は前年・平年を下回ると考えられます。

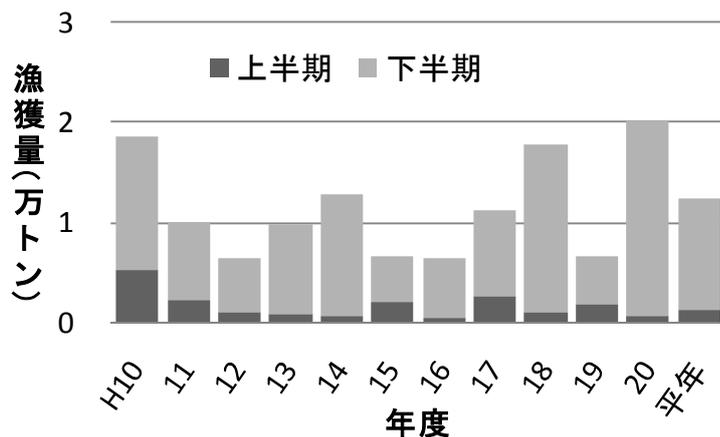


図5. 島根県中型まき網によるサバ類漁獲量の推移（年度別）

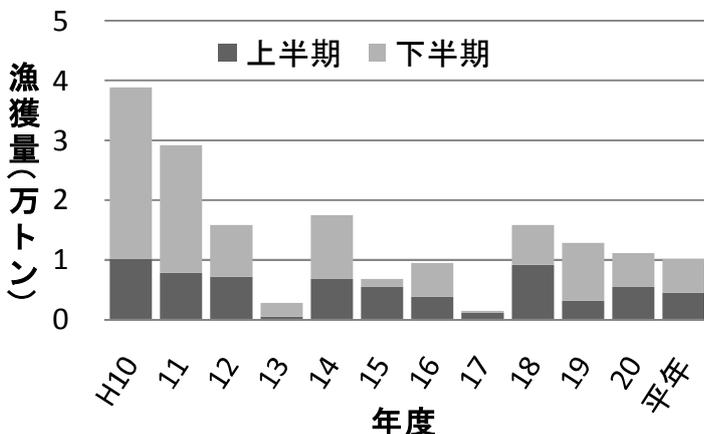


図6. 島根県中型まき網によるカタクチイワシ漁獲量の推移（年度別）

ウルメイワシは前年並みで平年を下回る

島根県の中型まき網によるウルメイワシの漁獲量は、平成14年以降はやや増加傾向にありますが、平成20年度下半期の漁獲量は約1,900トンと前年同期(約5,100トン)の約4割、平年同期(約2,500トン)の約8割におわりました(図7)。

今後の漁況は、漁獲の主体となる1・2歳魚以上(大きさ18cm以上; H20年・H19年生まれ)と0歳魚(大きさ5~15cm; H21年生まれ)の来遊量で決まります。産卵親魚として来遊する1・2歳魚の資源量は中くらいの水準と考えられています。また、0歳魚は予測困難ですが、親魚量が多ければ加入量も多いと考えられるため前年並みの水準と考えると、全体の来遊量は前年並みで平年を下回ると考えられます。

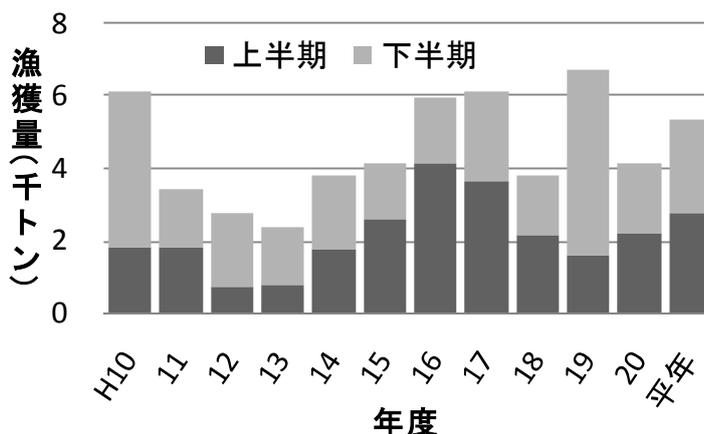


図7. 島根県中型まき網によるウルメイワシ漁獲量の推移 (年度別)

マイワシは前年を下回り、平年並み

島根県の中型まき網によるマイワシの漁獲量は平成15年以降やや回復傾向にありましたが、平成20年度下半期の漁獲量は45トンと前年同期(約3,700トン)の1%、平年同期(約1,000トン)の4%と低迷しました(図8)。

今後の漁況は、漁獲の主体となる1~3歳魚(大きさ15~20cm; H20年~H18年生まれ)と夏以降の0歳魚(大きさ15cm以下; H21年生まれ)の来遊量で決まります。このうち来遊群の主体となる1・2歳魚の資源量は前年を下回ると見積もられています。0歳魚の資源量を予測するのは困難ですが前年並みと考えると、全体の来遊量は前年は下回るものの、平年並みと考えられます。近年、マイワシにとって加入条件が良い年が続いておりやや回復の兆しがみられるものの資源水準は依然として極めて低いため、以前のような豊漁は当分望めないと思われま

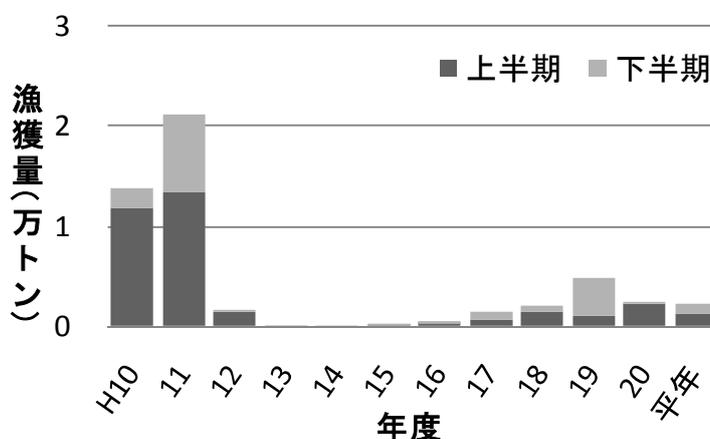


図8. 島根県中型まき網によるマイワシ漁獲量の推移 (年度別)